

Kappa Novels



お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。ありがとうございました。なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

長編アクション小説 非情の標的

昭和43年9月30日 初版発行

昭和49年4月1日 45版発行

著者 大 薮 春 彦
東京都世田谷区松原3-3-18

発行者 五十嵐勝彌

印刷者 堀内文治郎

東京都千代田区三崎町2-18-11
堀内印刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光文社
振替東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(明泉堂製本)

表紙の模様・意匠登録 116613

© Haruhiko Oyabu 1968

小説家としての小宮山

ひ　じょう　ひょう　てき
非情の標的

おお　やぶ　はる　ひこ
大藪春彦



カッパ・ノベルス

目次

蒸	第	裏	拷	加	無	毒	死	侵	攻	神	コ	畏
発	一	を	な	奈	線		神	入	防	戸	ール	な
	歩	か	問	子	器					に	ガ	
		く	ん	こ							ール	
5	13	22	29	37	44	52	59	67	74	82	90	98

援	リ	人	監	ボ	ヘ	試	細	海	遭	敵	待	兄
軍	ン			ー	リ	射	菌	の		地	伏	
				マ	コ		兵	争	難	へ	せ	
	チ	質	禁	ン	プ		器	い			弟	
106	114	122	129	137	144	151	159	166	175	182	189	201

本文のイラスト

遠藤 昭吾

蒸 発

冬の寒風が吹きすさぶ羽田空港に、ラテン・アメリカン航空のボーイング七〇七が着陸した。弱々しい午前の陽を受けて、陽気なラテン・アメリカ人たちがタラップを降りる。黒人の血が混じっている者も多かった。

旅客たちの最後のほうから、鷹のように鋭い顔をした日本人が降りた。年は三十ぐらいいだ。ダーク・スーツで獐猛なほどの筋骨を隠してはいるが、その体からはどこかジャングルの豹のような野性が滲みでている。

男はオーヴァーナイト・バッグを軽々と左手に提げ、空港ビルへ大股に歩く。少しガニ股だ。

空港内の出入国管理事務所の係官に、男はアルゼンチン国籍のパスポートを示す。

「フェルディナンド浅岡さんですか？ 向こうは、いま

真夏でしよう？」

ヴィザに入国のスタンプを押しながら係官は言った。「そうだ」

男はスペイン語で無愛想に答えた。

税関のカウンターに回る。

「拳銃や麻薬や宝石を持っではいませんか？」

ベルト・コンベアーで飛行機から回されてきた浅岡のスーツ・ケースを開きながら、税関吏は尋ねた。

「いや」

今度は浅岡は日本語で答えた。

税関吏はスーツ・ケースを掻きまわしたが、不審なものはいってないようであった。蓋を閉じると、

「オーケー」

と、チョークで通関のしるしをつける。

空港ビルを出ると、客待ちのタクシーが並んでいた。長く日本を離れている間に、国産車のスタイルが垢抜け

しているのに驚く。クラウンのタクシーに乗りこんだ浅

岡は、

「赤坂紀尾井町」

と、運転手に命じる。

八年ぶりの日本であった。はじめて通る高速道路の上から変貌した東京の街の風景を眺めていると、日本をあとにしたころのことが想い出されてくる。

敗戦の年、浅岡は小学五年生であった。本名を見一という。そして、弟の健次はまだ六歳であった。両親は、神田で下駄の問屋をやっていた。

東京に爆撃がはじまった昭和十九年から、兄弟は埼玉県川越にある祖父の家に預けられた。祖父の家業は、代続いた芋煎餅屋であった。父の兄の一家が家業を受け継いでいた。

食料難で、菓子などは一般国民の口になかなかはいらなくなった時代であったが、伯父の煎餅工場は、帝国陸軍御用であったために、原料の芋と米は十分に割り当てられた。伯父は儲けた金で農地を五町歩ほど買い、そこで焼き餅の原料にするという名目で、甘薯を工具に作らせ、それをヤミで横流ししてはさらに儲けていた。

二十年の四月、浅岡の両親はB二九から落とされた直撃弾をくってバラバラに吹っとんだ。無論、家も灰にな

った。浅岡は祖父と一緒に、泣きながら焼け跡を両親の死体を捜して歩いたことを覚えている。

そして敗戦。祖父はショックで寝こみ、三カ月後に死んだ。祖父の生きていたころは遠慮していた伯父夫妻は、浅岡を酷使しはじめた。

中学に行かせてもらうかわりに、浅岡は登校前と放課後は甘薯園の草取りをやらされ、夜は番小屋に泊まりこんで見張りだ。芋泥棒の一回を見つけてかかっていき、反対に袋叩きにされて呻いているところを、伯父に腰が立たなくなるほど殴りとばされた。

学校へ行けば、伯父の息子がはいっている番長グループのサンド・バッグ替わりにさせられた。冬になると、工場で芋の皮剥きだ。それでも、芋だけは腹一杯食べた。おもな蛋白源とカルシウムは、弟の健次が入間川で毎日バケツに一杯とってくる雑魚だ。

大きくなったら動物園に勤めるんだ、と口ぐせのように言っていた健次は、ヤナや網で魚を獲ったり、馬の毛を縫いあわせた毬でコジュケイやキジバトを捕まえるのがひどくうまかった。それらを甘薯園の番小屋で、二人は食ひ食った。

中学を卒業するころには、浅岡の体は大人を見おろす

ようになっていた。そして自分の力を自覚した浅岡は、番長グループの連中をもう少しで不具になるほど痛めつけてやった。伯父の息子は、浅岡に左腕をへし折られたが、伯父に告げ口をしたら殺すと嚇かされ、鉄棒から誤って落ちたのだと伯父に説明した。

中学を出た浅岡は、昼は煎餅焼きの無給職人として働き、夜間高校にはいった。そして、高校三年のとき、チャンスを待っていた浅岡は、とうとう伯父の暴言に対して暴力で応じた。

浅岡の拳が一閃すると、伯父は五メートルほど吹っ飛ばされ、襖を破って転がった。トマトを潰したようになつた口から折れた歯をこぼしながら、伯父は豹変した浅岡の凄まじい形相を見つめて失禁した。浅岡は容赦なく伯父の腕を逆手に振じあげ、

「こんな家、いつでも出て行ってやらあ。だけどな、タダ働させられた今日までの給料を頂かねえことには、出ていくわけにはいかねえ。年に二十万として、百万は頂戴する。今日、問屋からはいった金が百万あるはずだ」

と、血に飢えたような声で言った。

「痛い。放せ！ 警察を呼ぶぞー」

伯父は涙をこぼしながら呻いた。

「呼べるもんなら、呼んでみろ。あんたの脱税のやり方を、警察にしゃべってやる。こっちはこういうものを持っているんだ」

浅岡は自分の机の引出の鍵を外し、伯父の事務所から盗んでおいた過去三年間の裏帳簿を伯父に突きつけた。

百万円と共に川越を去った浅岡は、池袋の近くにアパートを借り、パチンコ屋の店員という職を得て、小学六年の弟健次を呼び寄せた。

それから、兄弟二人の生活がはじまった。浅岡は進学をあきらめ、三年後には、パチンコ屋のマネージャーにまでなることができた。一方では、池袋の暴力団光星会の準幹部にもなっていた。

昭和三十四年、浅岡は光星会の幹部にのし上がると共に、自分でも小さなバーを経営していた。そして健次は、東大農学部生物学科に入学した。渡り鳥の研究に一生を捧げるつもりだ、と健次は顔を輝かせた。

健次の入学式の夜、浅岡は祝盃に泥酔した。俺はヤク

ザになりさがってしまつたが、健次だけは社会の表街道を胸を張って歩ける人間になってくれ、と祈つた。

当時、光星会は、池袋に進出してきた三国人系の新興暴力団町田一家と抗争をくり返していた。町田一家の資力と武器弾薬は、光星会の五倍はあつた。

ついに八月、二つの暴力団の決戦の時が迫つた。浅岡はバーを処分して、健次が大学を終えるまで働かないで済むだけの金を作つた。

決戦の前日、浅岡は健次の名義にした預金通帳と印鑑を健次に渡した。

「生きていくのは辛いことだ。俺はある事情があつて、しばらくお前と会えなくなる。元気でな」

「兄さん、どうしたんです、僕にも打ち明けられないことですか？」

健次は叫んだ。

「ああ。だけど、俺はくたばるもんか。どんなことがあつても生き残つてやる。けどもし俺が死んだら、ヤクザな俺のことなんか忘れて俺の分だけお前が生きてくれ

よ」

「何を言うんだ、兄さん。兄さんはヤクザ者か知らないが、僕は尊敬している。兄さんがいなかったら、僕は今ごろ、毎日煎餅を焼いてなければならなかつた」

「……」

「兄さんは隠していても、僕には見当がつく。近いうちに、市街戦がはじまるんだろう？」

「……」

「逃げよう。僕は大学なんかやめてもいい。兄さんの命のほうが、何万倍も大事だ」

「ありがとう。だけど、もう、あとには引けない。俺が幹部になつたのは、パンチが早くて強いのと、ハジキの使いかたが人よりうまいからだけなんだ。いま怯気づいたと奴らに思われたんじゃあ、俺はどこに行つても鼻つまみにされる」

「だから、ヤクザの足を洗えばいいんだ」

「夜間高校中退の俺に、どんな職が見つかる？ セールスマンか？ 土方か？ 駄目だ。どこに逃げてても、奴らは追ってくる。裏切者は見せしめに消されるのが掟だ」
「……」

「俺は死ねない。まだまだこの世にやり残したことがある。健次、一つだけお願いがある」

「言ってくれ、兄さん」

「もし、俺のことが近いうちに不名誉な形で新聞に出たとしても、決して大学を辞めるなよ。生物学者になるのは、ジャリのところからのお前の夢だった。今は、その夢に手がとどくところに来ているんだ。もし、お前が一時の感情に駆られて夢を捨てたら、俺の今までの苦労が水の泡になる。俺自身のこれまでの存在が無になるんだ。身勝手な言い分だが、俺のために、大学を続けてくれ」

浅岡は手をついた。

翌日の深夜、光星会のビルは、機銃やライフル、それに拳銃や手榴弾で武装した町田一家のトラック五台に襲われた。

浅岡は五人を殺し、九人に重傷を与えた。しかし、浅岡の奮闘にかかわらず、光星会は壊滅状態になった。浅岡は、銃創を受けた会長の田口を、光星会の親戚筋に当たる新宿の桜葉会に運びこんだ。

警察と町田一家の追求を怖れた桜葉会は狼狽し、田口と浅岡を、麻薬の取引き関係にあるアルゼンチン船に押

しこんだ。

横浜を出てから三日後、田口は暗く湿った船倉で、腹膜炎を併発して死んだ。死体は海に投げこまれた。

アルゼンチンの麻薬のボスは、ブエノス・アイレスの市会を牛耳っているドン・ラファエロという大牧場主であった。百五十万町歩の牧場をブエノス・アイレス郊外に持っている。

アルゼンチンの出入国管理官や税関吏には、ワイロがきいた。いや、ワイロ次第といったほうが正確だ。パスポートもヴィザも無しに、浅岡は無事に上陸できた。そして、ドン・ラファエロの牧場で牧童として働くことになった。

牧場で浅岡は、射撃と格闘の腕に、さらに磨きをかけた。一年後、スペイン語を自由にしゃべれるようになった浅岡に、ドン・ラファエロは、フェルディナンド浅岡という名のアルゼンチン国籍をとってくれ、自分のボディ・ガードの一人に加えた。

ボディ・ガードを振りだしに、浅岡のランクは年ごとに上がっていった。今では、ドン・ラファエロの傀儡として、市議員を勤めている。

アルゼンチンと日本のあいだに、犯人引渡し協定は無い。しかも、浅岡の国籍はアルゼンチンだ。日本から姿を消して七年以上たつから、日本の戸籍は自動的に抹消されているはずだ。市会議員になった去年の六月、浅岡は日本にいる健次に手紙を出しはじめた。

健次は、驚きと嬉しさと懐かしさで一杯になった返事をよこした。大学を出てから、農林省の鳥獣試験場に奉職して、渡り鳥の研究を続けている、と書いてあった。浅岡は、再び手紙を出して、ぜひアルゼンチンに遊びに来るように言った。片道の切符さえ買ったなら、あとはみんな俺に任せてくれ、と書き添えた。

健次の返事は、渡り鳥に関連した重要な研究をやっている、いまは動けないが、冬休みになったら必ずそちらを訪れてみたい、というものであった。

十二月が来た。南半球にあるためにアルゼンチンでは夏だが、日本では冬休みにはいつているはずだ。しかし、健次から出発の通知はこなかった。

十二月になって、浅岡は健次に三度航空便を出した。そのいずれにも、なしのツブテであった。今年の一月になって、浅岡は我慢できずに、中目黒にある農林省鳥獣

試験場アパートの管理人に国際電話を入れた。健次はそこに住んでいる。

管理人の声は、北米経由でも、明瞭に聞こえた。

「浅岡健次さんのことですか？ 弱りましたな」と言う。

「どうしたんだ？ 私は健次の兄だ」

「浅岡さんは、行方不明です。去年の十月のはじめころから。荷物も何もかも置きっぱなしにして、誰にも内緒で姿を消したんです。いま流行の人間蒸発というやつで、すかね。ともかく、荷物をどうにかしてくれないと、あとにはいる人が困りますよ……」

高速道路を降りたタクシーは、紀尾井町のホテル・ニュー・オータカの玄関前に停まった。ボーイにスーツケースを持たせ、浅岡はフロントに近づいた。

「予約してあった浅岡だが」

と、わざとぎこちない日本語で言って、パスポートを示した。

「いらっしやいませ。お待ちしました」

クラークは、深々と頭をさげ、パスポートの番号を控えた。浅岡が案内された部屋は十二階であった。三宅坂の先に、お堀と皇居の森が見える。浅岡は、空港の銀行出張所でペソから替えた日本円でボーイにチップをやり、引きさがらせた。二間続きだ。浅岡は浴室で着けているものを脱ぐ。鋼のような筋肉が盛りあがった体には、刀傷や銃創のあとが数箇所あった。

ふくれあがったパンツを脱ぐと、左の内腿に、革ケースにはいった口径七・六五ミリのモーゼルHSCの自動拳銃が包帯で縛りつけてあった。ホルスターには、予備弾倉を二つ差しこんだポケットがついている。ガニ股は、その拳銃のせいであった。

浅岡はホルスターごと拳銃を外し、鏡の裏側にある化粧品入れに仕舞った。浴槽に湯を満たして、簡単に埃を落とす。

浴槽を出た浅岡は、ワイシャツの上から、拳銃のホルスターを左腋の下に吊った。スーツ・ケースの二重底から出したハンテイング・ナイフを左脚に縛りつける。

上着をつけると、拳銃の存在はまったくわからなくなる。ロビーに降りてみると、もう旅行客目当てや、カモ

と待合わせしている高級娼婦が点在していた。世界中、ホテルの風景はあまり変わらない。

浅岡は、地下の名店街で鮭屋を見つけ、トロやアワビやウニをつまんだ。久しぶりなので、二十数個を平らげてしまう。勘定を命じて、八年前とくらべて値上がりのひどさに軽く驚いた。

タクシーで中目黒に向かった。赤坂見付の立体交差にも驚く。碑文谷街道に来たときには、車の左側通行にも慣れた。

健次がここ二年ほど住んでいた農林省アパートは、黒電話局の手前で東横線のほうに折れたなかにあった。そこに着く前に、鳥獣試験場第二分室と看板が出た建物の前を通る。アパートは六棟ほどであった。公団式のものだ。浅岡は健次が住んでいたD号の棟の管理人室のベルを押した。

「誰です？」

ドアの覗き窓のカーテンが開き、国際電話で聞き覚えのある声がした。

「浅岡健次の兄です。お邪魔でなかったら、お話をうかがいたいんです」

「じゃあ、アルゼンチンからはるばると？」

「ええ」

「ちょっと待ってください」

ドアが開いた。定年退職した下っ端役人らしい六十ぐ
らいの男が、浅岡を玄関奥の三畳の部屋に招き入れた。

「弟が蒸発した、というのは本当ですか」

浅岡は勧められるままに籐椅子に腰をおろすと切り出
した。

「嘘をついたってはいりませんや」

管理人は笑った。

「正確には、いつから姿を消したんです？」

「ええと、そうですね。十月三日でした。役所から帰っ
てきてからしばらくして——午後八時過ぎでした。よそ
いきの背広をつけて階段を降りてきた弟さんを見たんで
す。デートですか、と私が訊くと、まあそんなところ
だ、なんてニヤツとして出ていきましたがね。それが弟
さんを見た最後です」

「荷物は持っていましたか？」

「手ぶらのようでしたな」

「弟に恋人はいたのかな？」

「そりゃ、いたでしょうな。あのとおり優男だから、女
のほう放っておかなかったと思いますよ。そういえ
ば、ときどき女の人がここに電話してきてたな。弟さん
の部屋に電話がないから、私が取りつぐんです」

「女の名前は？」

浅岡の瞳が光った。

第 一 步

「電話を掛けてきた女の名前ですか？ ちょっと待ってくださいよ……ええと……ああ、思いました。草野さんと言っていましたよ。草野路子さん」

管理人は言った。

「何をしている女かわかりますか？」

浅岡は尋ねた。

「さあ、そこまでは……」

「弟の部屋を覗かせてもらえてしょうか？」

「身分証明書を見せていただければね……形式的なことですが、あとで問題になると、私の責任になるんでね」

「これでいいでしょうか？」

浅岡はパスポートを示した。

「お恥ずかしい次第だが、英語が読めないの」

「じゃあ……」

浅岡は思いついて、内ポケットから、健次の手紙を取り出した。封筒から内容を出す。

便箋に素早く目を通して、管理人は頷いた。

「わかりました」

と、マスター・キーを取り上げる。

健次の部屋は三階にあった。ドアの鍵はマスター・キーで開いた。ドアを開くと、湿っぽい空気が流れた。

はいったすぐ奥にダイニング・キッチン、左手に居間兼寢室の八畳間があった。

流しには、汚れた食器が積まれてあった。左の八畳間には、本棚にあったらしい書籍がみんな落ちて散らばっていた。机の引出しは開けっ放しだ。カーテンをはぐると、ヴェランダに面したガラス戸に鍵がかかってなかった。

浅岡に続いて部屋にはいった管理人が、小さな驚きの声を漏らした。

「弟は、整頓好きだった。私はだらしが無いほうだが……」

浅岡は呟いた。

「泥棒がはいったんでしょか？ こいつは、ちょっとひどすぎる」

管理人は呻いた。

「まだ、すぐにはわからないが、屋上からロープをたらしたら、ヴェランダに降りるのは簡単でしょう——」

浅岡は窓ぎわに立って言った。そして、

「弟の失踪は、警察に届けてあるんですか？」

と、眩くように言う。

「ええ。鳥獣試験場の分室長さんから言われましてね。

わたしが届けて、捜索願いを出了しました」

「……………」

「警察の話では、現在七万枚近い家出入票と二万枚近い身元不明死体票があるそうです。でも、実際には失踪しても未届けの場合が多くて、実際は年に五万人ほど蒸発しているから、一人一人を懸命に捜すわけにいかない、ということでしたよ」

「なるほど」

「どうします、泥棒がはいったと、警察に届けますか？」

「いや、証拠が無いだろう。弟が散らかしたのではないとは、絶対に言い切れないからな」

「ともかく、この荷物を何とかしてくださいよ。後任の人が、ここに移ってこれなくて困ってるんですから」

「後任？」

「ええ、お気の毒ですが、弟さんは、失踪日にさかのぼって、役所のほうを懲戒免職になられたんで」

「……………」

「無断欠勤の上に、その後の連絡も無い、ということ」

「無理もないな」

「どうします、荷物は？」

「そう、あわてないでくれ」

浅岡は、開いた机の引出しや、生物科学の本のあいだを、失踪の手がかりになる日記かメモ帳が無いかと捜した。

徒労であった。状差しにも、一通のハガキもない。少なくとも俺が出した手紙ぐらいいは残っているはずだ、と浅岡は思ったが、それも無かった。戸棚には上等の服が何着もある。

浅岡は溜息をつき、腹立ちまぎれに、足もとにあった百科辞典のように分厚い原書を蹴った。

原書は開いた。そして、ページの中央がくり抜かれているのが見えた。くり抜かれたなかに注射器のケースがはいつている。

生物学をやっている健次のことであるから、注射器を使ったとしても不思議ではない。しかし、本のなかに仕舞うとは不自然だ。

浅岡はケースを取り上げ、蓋を開いた。

注射器のポンプと、五、六本の針がはいつている。浅岡は注射器の匂いを嗅いだ。かすかに匂うのは、ヘロインのものであった。素人にはわからないだろうが、浅岡にはすぐにピンときた。健次は、いつの間にかヘロインに犯された体になったのか……と、浅岡は唇を噛んだ。

健次の荷物の引取りは、アパートを借りるまで二、三日待ってくれ、と浅岡は管理人に言い、一万円のチップを握ませた。

農林省アパートを出た浅岡は、すぐ近くにある鳥獣試験場第二分室に足を運んだ。建物の横には、鳥の飼育ケ

ージが並んでいる。

ナフタリンとクレゾールとの匂いのする建物にはいった浅岡は、受付の守衛に呼びとめられた。

「浅岡健次の兄です。弟の失踪当時のことについて、同僚や上司のかたに話をうかがいたい、と思ひまして」

「それは、どうも。ご心配のことでしょう。あのかたがいられた鳥類第三課は、左の廊下を行ったところです」

守衛は答えた。

「ありがとう」

浅岡は軽く頭をさげた。

鳥類第三課の部屋は広かった。そして、三方の壁は、天井近くまで、さまざまな鳥の剥製やアルコール漬けの罐で一杯になっている。

部屋には、五、六人の職員がいた。昼食後の休憩時間らしく、将棋を指したり、雑談したりしている。

浅岡は自己紹介した。男たちは、複雑な表情になった。

「弟の失踪の原因について、思い当たることはありませんか？」

浅岡は尋ねた。